

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.3 おじさん危機 一髪（後編）

乱れに乱れた生活習慣を堅持していた主人公の御手洗 透氏。生活習慣何のその。不健康が勲章とばかりに息巻き、いつものように床に就いた。とある明け方。時刻は午前4時23分。吐き気とともに、身体は鉛に包まれたように重く、深く深く漆黒の闇に吸い込まれていく。遠ざかる記憶とともに途方もない不安が果てしなく広がる。「え？何で？何？なに？ナニ？何？いったい何が起ったんだ〜〜〜……………」

気が付けば、口の中に管が入っている。息を吐こうと思うのに無理やり酸素を送り込まれてくる。何だこの苦しさは？容赦なく吹き込まれてくる酸素。「何？何だ？」「落ち着け。冷静に、冷静になろう。いったい何が起きたんだ。うわ、また酸素が来る！夢なら早く冷めてくれ。4時23分だったよな。今何時だ。うわ、また酸素だ」。唾がこみ上げてく

る。さっきの吐きそうな感じとは違って、口には管が。人工呼吸器がついている。「何をするんじゃ」と管を取ろうとするが、今度は手が動かない。暴れようとするが足も動かない。遠くで自分を呼ぶ声がする。「御手洗さ〜ん。分かる。分かったら手を握って」「何をいうとんじゃ、手が動かんのじゃ。握れるわけないやろー」。……………待てよ。冷静に……………。冷静になれば、指は動く。誰かの手を握れる。誰かの手を。この温もりはいったいなんだ。

こうして私が生還したのはあの日から4日が過ぎていた。後で知ったが、朝4時20分に急性心筋梗塞になったらしい。その後、心室細動という急性心筋梗塞の合併症により、私の心臓は止まった。首から下が棺桶に入った頃、異常に気が付いた家内が救急車を呼び、救急隊のAEDが私の忘れかけた心臓の鼓動を再び呼び戻した。心停止時間は10分。脳低温療法という最新医療により私は後遺症なく社会復帰できた。

いつものことをいつものようにしていたはずが、ある日突然襲ってくるパニック。そう、何の前触れもなく。それが、心血管疾患なのです。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一